

オ 次世代への技術の継承

当地域では、毎年、農業総合研究センターにおいて、共通の栽培暦等による生産者全体に対する研修会を開催するとともに、各生産者組織においても市町と連携しながら、新規生産者に対して熟練した生産者が現場で技術指導を行い、大雨による湿害などの自然災害や生態系の変化に対応する生産・加工技術の伝承を図り、次世代への農業システムの継承に努めている。

（４）文化、価値観及び社会組織



写真 38 紙の上に並べて乾燥させる

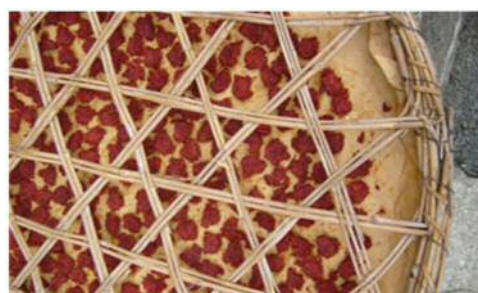


写真 39 乾燥が終了した「摺花」

「紅餅」生産の伝承には、平成 28 年に設立された紅花の生産から加工・販売までに関わる関係機関が構成員となる山形県紅花振興協議会は、紅花の生産・加工体制の強化やシステムの継承・保全に寄与している。

紅花取引の市が起源とされる山形市で毎年 1 月に開かれる初市では、紅花の豊作祈願の縁起物であった「旗飴」が今でも露店の店先に並ぶなど、伝統的な農文化が現代に継承されている。

また、谷地八幡宮^{やち}の装束や伊勢半本店の化粧紅に見られる「紅」^{あか}や現代でも県内各地に息づく「雛文化」は、山形の紅花が古来より京都等の上方文化とつながってきた証となっている。

また、初夏の山形の象徴となっている優れた景観に加え、花摘みや染色などの紅花に関わる農業体験は、観光誘客や都市との交流による地域活性化のシーズとしての役割が期待されている。

ア 生産の再興を支援した組織

本地域では、江戸時代以降、地域の豪商・豪農が生産・加工を主導してきたが、江戸末期の中国紅や明治に入ってから化学染料輸入、さらには第二次世界大戦時の作付統制等により、作物転換等による生産衰退と復興を繰り返す過程で、天皇の御即位式や伊勢神宮^{せんぐう}の遷宮用調度品や伝統的な化粧品等の不変的な需要とそれに応えようとする生産者組織が存在した。

明治末期、出羽村（現山形市）の人々は、紅花の再興を願い、収益を度外視して

生産を続けて皇室や伊勢神宮からの需要に応え、また、山形県立漆山農事試験場^{たかだま}においても明治 37 年から 41 年まで紅花生産の研究が続けられ¹²⁾、高嶺村（現天童市）にも生産が広がった。

第二次世界大戦後には、山形市出羽の佐藤八兵衛が、戦後間もなく近隣の農家の囲炉裏の火棚に載っていた一握りの紅花種子を見つけ、畑に播いたところ発芽・開花し、この株が紅花生産の再興に大きな役割を果たした²⁾。

戦後、紅花資源を復興し、紅花の生産・染色用加工システムの維持・保全するため、昭和 25 年に山形市や寒河江市、河北町が連携して「山形紅花振興会」が組織されるとともに、昭和 29 年には山形市で「出羽紅花生産組合」が結成され、染料や化粧品向けの本格的な生産が復興した。

さらに、昭和 40 年に「山形県紅花生産組合連合会（4 組織、組合員数 253 名）」が設立され、県内の紅餅生産者が組織化されたことにより、化粧品や染料向けの契約栽培が開始され、昭和 40 年代後半にはその契約栽培が増大し、「最上紅花」の生産が再興した^{16, 29)}。

化粧品メーカーとの契約終了などで生産量は減少したが、昭和 57 年の「山形県の花」への制定や「紅花の山形路」と銘打った観光キャンペーンの展開など、衰退の危機に直面する度に、紅花の里を蘇らせようと山形県が一丸となって取り組んできた。

また、白鷹町では、平成に入って紅花加工品の生産振興に本格的に取り組み始め、平成 27 年には「日本の紅（あか）をつくる町」をキャッチフレーズに、紅（あか）色に注目した特徴ある生產品や観光に注目して全国にその名を広める取り組みを行っている。

イ 山形県紅花振興協議会による紅花振興

本県では、平成 28 年度の「山形県紅花振興協議会」の設立により、地域の紅花生産者組織、と農業団体、観光関係団体、織物業、クッキングスクール、行政（県、県研究機関、市町）などが一体となり、紅花生産者の育成確保や技術開発、販路開拓などに取り組む役割分担体制が構築された。

平成 20 年以降、高齢化等で減少していた生産者数は増加傾向となっており、農業者数が減少している他の農作物や地域への応用が期待できる（図 5）。

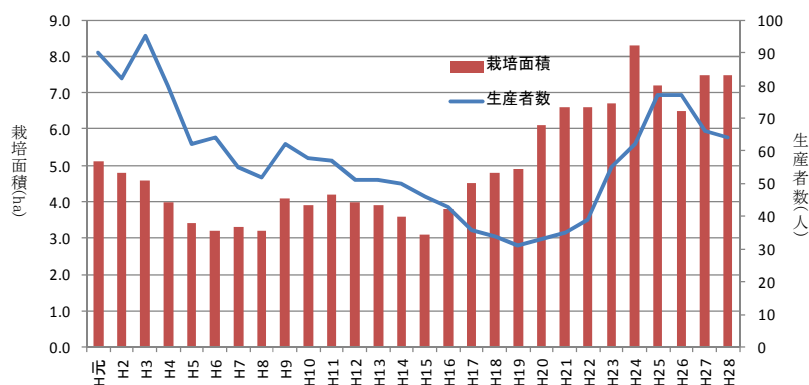


図 5 加工用紅花の生産者数と栽培面積の推移

ウ 紅花市が起源となる行事

山形市では、毎年1月10日に市神祭りとして山形市内七日町から十日町にかけて約400年の伝統を持つ初市が開かれ、市内外から約20万人を超す人出で賑わう。そこで売り出される「旗飴」はその年の紅花が豊作であるように市神様に捧げたもので、^{むしろ}苳にならべた^{べにもち}紅餅を形どったものであるため、別名「花飴」とも呼ばれ¹⁶⁾、現在も縁起物として露店の店先に並ぶ。

江戸時代には、七日町と十日町で紅花の市が開かれ、旧暦6月には連日市が開かれており、享保年間の古文書「名物紅の袖」には、「紅花市場、七日町、十日町両所へ、勝手々々に罷出相調申候、(以下、略)」とあり¹⁶⁾、山形市の初市の起源となっている。

エ 紅花染めの装束での神事

紅花から加工した紅餅は、伊勢神宮等の式年遷宮の際に奉納される神宝や装束にも使われてきた。代表的な装束の一つである「緋錦御衣(あけのにしきのみぞ)」(写真40)から、刀や馬具の革紐に至るまで多くの調度品等の染色に紅花が使われ、古くから上方との繋がりを持ち、文化のやりとりがあったことがわかる証となっている。

また、紅花の大きな産地であった河北町谷地の八幡宮の例祭「どんが祭り」では「林家舞楽」が演じられ、その代表的な演目「陵王」の装束(写真41)の赤色も紅花で染められたものである。



写真40 緋錦御衣(あけのにしきのみぞ)



写真41 林家舞楽「陵王」の装束

オ 紅花交易によってもたらされた「雛文化」

最上川の舟運で京と結びついた紅花商人たちは、江戸時代、京からの帰り荷として呉服地や瀬戸物、塩、砂糖などの他、調度品、絵画等の美術品も持ち帰った。その中には、紅花染めの着物を使った享保雛や古今雛もあり、いまもなお、最上川流域の山形市や酒田市、中山町、河北町、酒田市などの豪商や地主宅等で数多く現存している。

当時、紅花商や富豪家で「節句市」等の際に雛人形の一般公開が行われ、市を訪れたものを魅了し、現在でも「山形雛のみち」や「庄内雛のみち」といわれる雛祭りが

盛んに行われ、紅花は地域住民の生活文化に息づいている。

このことは、外国産品や化学染料の輸入や第二次世界大戦時の作付統制などの社会的危機を乗り越え、今日まで生産が続けられている原動力となっていると考えられ、本農業システムは社会状況変化に対応したレジリエンスを有していると認められる。



写真 42 雛人形

カ 日本古来の化粧紅への利用

当地域の紅餅^{べにもち}は、江戸時代から続く日本古来の化粧紅である「小町紅」(株式会社伊勢半本店・東京、写真 43)の原材料となっており、希少価値を有する天然色素として使用される等、日本唯一の「紅餅」^{べにもち}生産地として日本全国の実需者の需要に応えている²⁹⁾。



写真 43 「小町紅」
(伊勢半本店)

キ 「紅花まつり」、「花笠まつり」などによる交流人口の増加

山形市高瀬地区では、「山形紅花まつり」が緑深まる山間の里に赤黄色に咲きそろう紅花畑を舞台にして毎年7月上旬に開催されている(写真 44)。今年で 33 回を数えるこの祭りには、県内はもとより全国から多くの観光客が訪れ、初夏の山形を彩る恒例のイベントとなっている。



写真 44 第 31 回山形紅花まつり
(平成 28 年、山形市高瀬地区)



写真 45 紅花畑と「紅花むすめ」(白鷹町)

天童市^{べにもち}、河北町、中山町、白鷹町でも毎年開催される「紅花まつり」と、花笠の花が紅餅を表しているとされる(写真 46)東北 4 大祭の「花笠まつり」(写真 47)を合わせて、県全体では 100 万人を超える多くの観光客が山形を訪れている。

また、主要産地の河北町では、昭和 59 年に紅花の集荷出荷で財をなした豪商の屋敷跡地に「紅花資料館」を設置し、紅花の歴史的、文化的な情報発信と、紅花染め体験等の各種体験を通して、来訪者への紅花の理解を深めている¹²⁾。

さらに、「見てよし、着てよし、食べてよし」の紅花は、紅花摘み体験、紅花染

め体験、写真撮影会などの体験型観光を通じて、都市住民に歴史や文化を伝えながら、都市と農村の交流を促進している。

このように、紅花は、さくらんぼと並ぶ初夏の山形の象徴で、「花笠まつり」を合わせて、紅花を目的に来県する観光客数は100万人以上で、地域経済への波及効果は高く、観光振興や都市と農村交流の一翼を担っており、観光地等の直売所での切り花や紅花若菜、赤色素などを使った加工食品など紅花関連商品の販売なども行われ、農家の所得の増加につながっている。

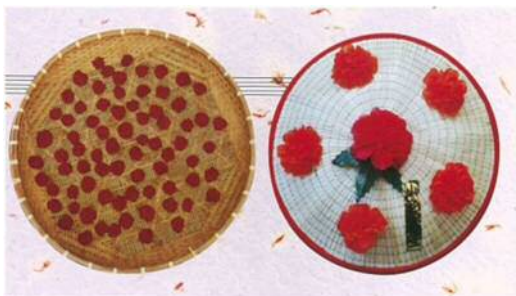


写真 46 左：紅餅、右：花笠



写真 47 花笠まつり
(画像提供：山形県花笠協議会)

ク 農業教育や体験学習による農耕文化継承

地域の熟練した農業者が、一般消費者向けに紅花講座を開催するとともに、地域内の小・中学校等において、紅花の植栽、紅花の加工品生産や紅花染めの体験学習の指導を行い、伝統文化の継承を図っている。(写真 48)。

江戸時代に紅花を江戸や上方に運んだ最上川舟運史の学習と合わせて次世代にも紅花文化の歴史的価値を継承すべく、教育界も関係団体と協力体制を構築しながら全面展開をしており、広く県民の理解と協力を得ている。



写真 48 中学生への紅花加工品生産の体験学習

(5) ランドスケープの特徴

紅花の生産と染色用「紅餅」への加工は、農家の複合経営の重要な一部門としての位置づけと紅花生産に適した最上川流域の肥沃な土壌や朝霧が発生しやすい盆地性の気候を活用し、450年前から輪作と堆肥などの有機物の施用により栽培を継続しながら発展してきた。

その風景は、自然の緑の中に彩りを与え、松尾芭蕉の俳句や映画「おもひでぽろぽろ」で取り上げられるなど、懐かしく日本人の心を揺さぶる優れた景観である。

また、現在も地域景観の保全やイベント用の生産のみならず、一般家庭や小・中学校での観賞用植栽も日常的に行われている。

ア 古文書に記された景観

天明8年に幕府の役人たちの巡見に随行した学者が書きつづった「東遊雑記」^{とうゆうざつき}には、赤羽毛峠（現在の山形市長谷堂地内）の頂上よりの展望を「原野大いに開けおよそ十万石もあらんと覚えし所、^{たどころ}豊を敷きたるとき田所なり。この節紅花盛りにて、満地朱をそそぎたるが如く、うつくしきこと何にたとえん方なし」と^{かた}16)、紅花が咲き誇っている情景を記している。

イ 俳句や映画に取り上げられる景観

芭蕉は、「奥の細道」の中で、咲き始めの可憐な一輪咲きの様子を「まゆはきを^{おもかげ} 俤^{べに}にして 紅粉の花」、畑一面の咲き誇っている紅花畑で花摘みをしている情景を「行く末は 誰が肌ふれむ 紅の花」と心を揺り動かされ、美しい句を詠んだものと思われる。

また、平成3年に公開されたスタジオジブリ制作の映画「おもひでぽろぽろ」では、昭和50年代後半から60年代の山形の紅花畑と田園風景が生み出す、他には見られない独特な景観が観る者を魅了した（写真49）。



写真 49 紅花による独創的な景観
(山形市内)

ウ 初夏の山形を象徴する景観

紅花生産そのもの、また、その紅花を摘む姿は、そのままランドスケープとして伝承されてきており、紅花は「県の花」として広く県民に定着し、当地域では、「紅餅」生産用の畑の他、地域景観の保全やイベント用の栽培のみならず、一般家庭や小・中学校の花壇での観賞用植栽が極めて日常的に行われ、緑豊かな当地域の自然の緑の中にパッチワーク的に赤、黄の彩りを与えている。

最近では、幹線道路の沿道添いや、観光さくらんぼ園の周辺等にも植栽が増え、本県を代表する初夏の花として様々な場面で活用され（写真 50、51）、紅花が創り出すランドスケープは、初夏の山形を象徴する景観となっている。



写真 50 花壇や沿道への紅花植栽
(山形市内)



写真 51 観光さくらんぼ園での植栽
(天童市内)

エ 紅花が咲き誇る景観を生かした地域の農地保全

紅花は、別名「末摘花^{すえつむはな}」とも呼ばれ、その名は茎の末の方から咲いてゆく花を順次摘み取ることから来ている。「末摘花」は古今和歌集や万葉集などに詠まれており、平安時代から摘み取りが行われ、染色用や口紅として使われていたことがうかがわれる。

初夏に開花する紅花は、開花始めの鮮やかな黄色から徐々に紅色へ移り変わり、その景観は全国的にも希少で、現代ではこの最上川流域でしかみることができないものとなっている。

「紅花まつり」などが開催されている地域や山寺などに代表される県内の観光地や誘客の多い施設などでは、地域の耕作放棄地へ紅花が植栽され、生物多様性の回復や保全農地保全作物や観光資源として活用され、失われる危険性のある紅花の遺伝資源と景観が維持されている。

○参考文献、資料等

- 1) 相澤直樹 (2015) : ベニバナの品種について. 特産種苗第 21 号:78-82
- 2) 朝日新聞社編 (1974) : 紅花＝山形県. 新風土記 1 : 15-16
- 3) 五十鈴川寛司・阿部篤智・酒井友幸・遠藤幸子・高橋玲子・齋藤久美・西村幸一・新野清 (2012) : ベニバナ新品種「夏祭」の育成とその特性. 東北農業研究:65
- 4) 岩田浩太郎 (2016) : 柏倉家ものがたり. NPO 法人柏倉家文化村
- 5) 小原平太郎・小野寺準一・佐藤慎吾 (1993) : ベニバナの紅色色素カルタミン. 山形大学紀要 (工学) :22
- 6) 笠原義正 (1996) : “くれないの花” (紅花) の秘密. 山形県衛生研究所ニュース:100
- 7) 笠原義正・鈴木道子 (1999) : 紅花の血中成分に対する作用. 山形県衛生研究所報:32
- 8) 笠原義正 (2002) : 紅花の赤色・黄色色素画分の薬理作用. 山形県衛生研究所報:36
- 9) 勝見直行・遠藤昌幸 (2012) : 紅花加工品“紅餅”の製造時における適切な花ねせ温度・日数. 東北農業研究:65
- 10) 勝見直行、佐藤寛人、羽角彩音 (2018) : ベニバナの色調・色素含有量の品種比較. 山形県農業総合研究センター試験研究成績書
- 11) 勝見直行・遠藤昌幸・加藤智弘 (2016) : ベニバナ加工品「紅餅」の高品質加工技術の開発. 山形県農業研究報告:8
- 12) 河北町紅花資料館編 (1994) : 紅花資料館 よみがえる紅花. 河北町教育委員会
- 13) 菊地栄一 (2015) : 紅花加工品の製造とその利用. 特産種苗第 21 号:83-87
- 14) 黒田チカ (1930) : 紅花の色素カーサミン (第一報). 日本化学会誌:51
- 15) 今田信一 (1979) : 改訂最上紅花史の研究. 高陽堂書店
- 16) 今田信一 (1980) : ベニバナ閑話. 山形県河北町
- 17) 今野周 (2010) : 地域食材大百科 ベニバナ. 農山漁村文化協会
- 18) 笹沢信 (1998) : 新山形風土記 2 紅花読本. 一粒社
- 19) 笹沼恒男 (2014) : ベニバナの系統進化・多様性と山形のベニバナ「最上紅花」について. FFI ジャーナル編集委員会
- 20) 鈴木武 (1977) : ベニバナ. 遺伝 1977 年 5 月号
- 21) 早田茂松 (1984) : 紅花入門 紅花は咲いている. 山形県米沢市
- 22) 錦秀斗、今野周、勝見直行、羽角彩音 (2017) : 紅花品種比較 (栽培) 試験成績. 山形県農業総合研究センター
- 23) 畠山春奈、青柳沙緒莉、高橋優利佳、相澤由佳里、笹沼恒夫 (2014) : 東北

育種研究集会要旨集. 山形大学農学部

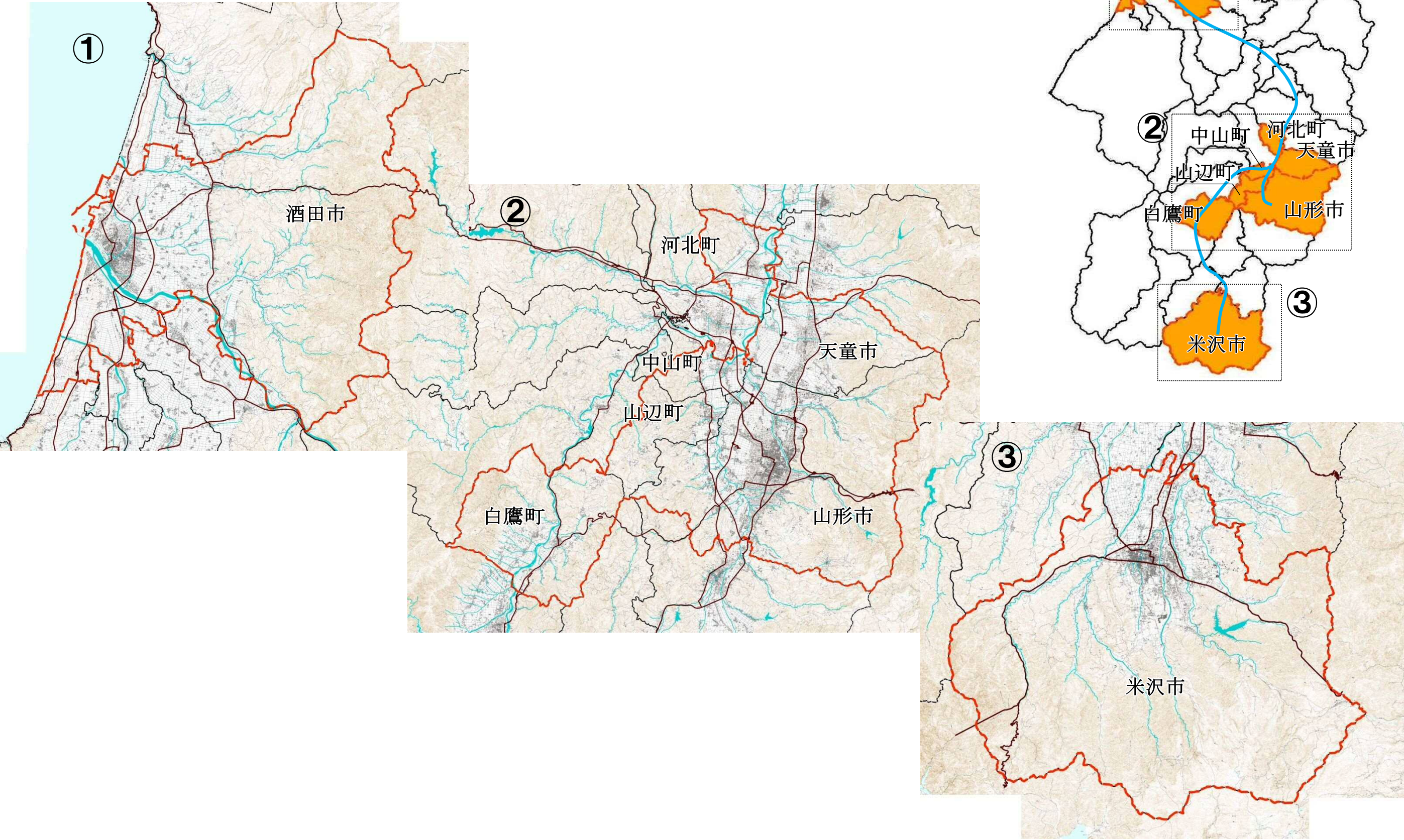
- 24) 平松緑 (2001) : 紅花と健康について. 東北公益文科大学総合研究論集:1
- 25) 古田久子 (2002) : 紅花を食材ととらえて幾星霜. 現代と公益:3
- 26) 森岡裕人・石塚健・大場剛・村川敬二・木山英俊 (1986) : 紅花色素の有効利用に関する研究. 山形県工業技術センター報告:18
- 27) 山形県 (1969) : 山形県史. 本編 2 農業篇 (中)
- 28) 山形県 (1996) : ベにばな栽培の手引き.
- 29) 山形県農林水産部 (1983) : 紅花に関する調査資料.
- 30) 山形県立農業試験場 (1977) : 山形県立農業試験場八十年史.
- 31) 山形県村山総合支庁産業経済部商工労働観光課 (2003) : 創作紅花料理レシピ集.
- 32) 山形県紅花生産組合連合会 (2016) : ベにばな 50 周年のあゆみ
- 33) 山形在来作物研究会 (2003) : 山形在来作物研究会誌 SEED:Vol. 1
- 34) やまがた街角 6・7 月特集/最上紅花 (2008) :46-49
- 35) 結城勇助 (1983) : ベニバナ生産の現状と今後の課題. 農業及び園芸:58
- 36) 結城勇助 (1987) : 日本の特産農産物 (ベにばな). 農水省農産園芸局
- 37) 横山昭男 他 (1997) : 最上川と舟運 青苧・紅花商人. ヨークベニマル
- 38) 渡部俊三 (1991) : 山形のベニバナ―雪国に咲く熱砂の花. 荘内日報社

○添付資料

1 地域の位置図（詳細）、土地利用図

＜地域の位置図(詳細)＞

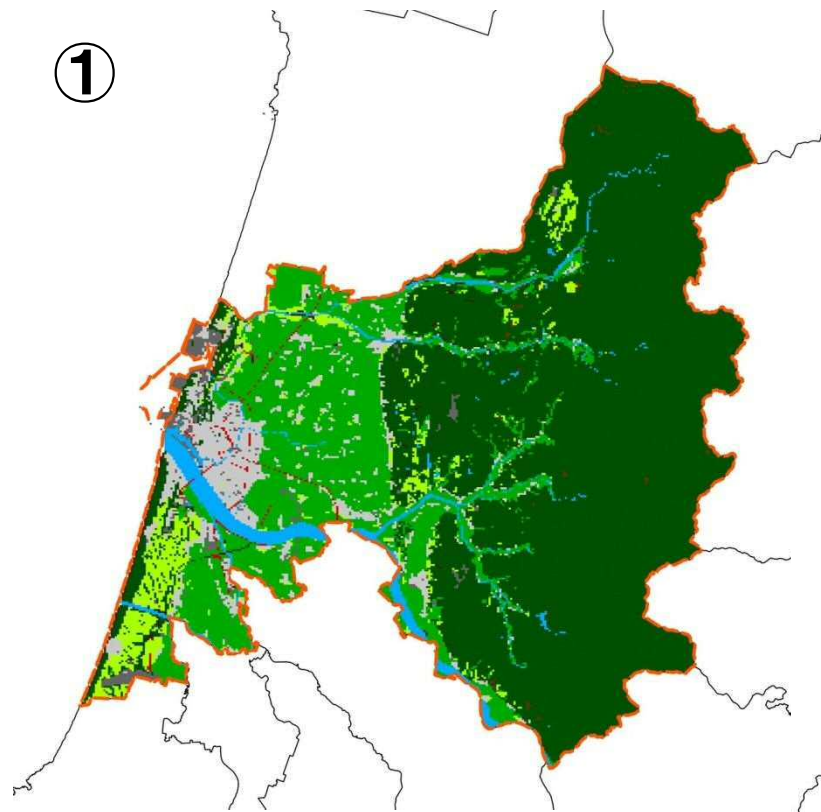
座 標：北緯 37 度 44 分 2 秒 ～ 39 度 12 分 31 秒、東経 139 度 31 分 13 秒 ～ 140 度 31 分 51 秒



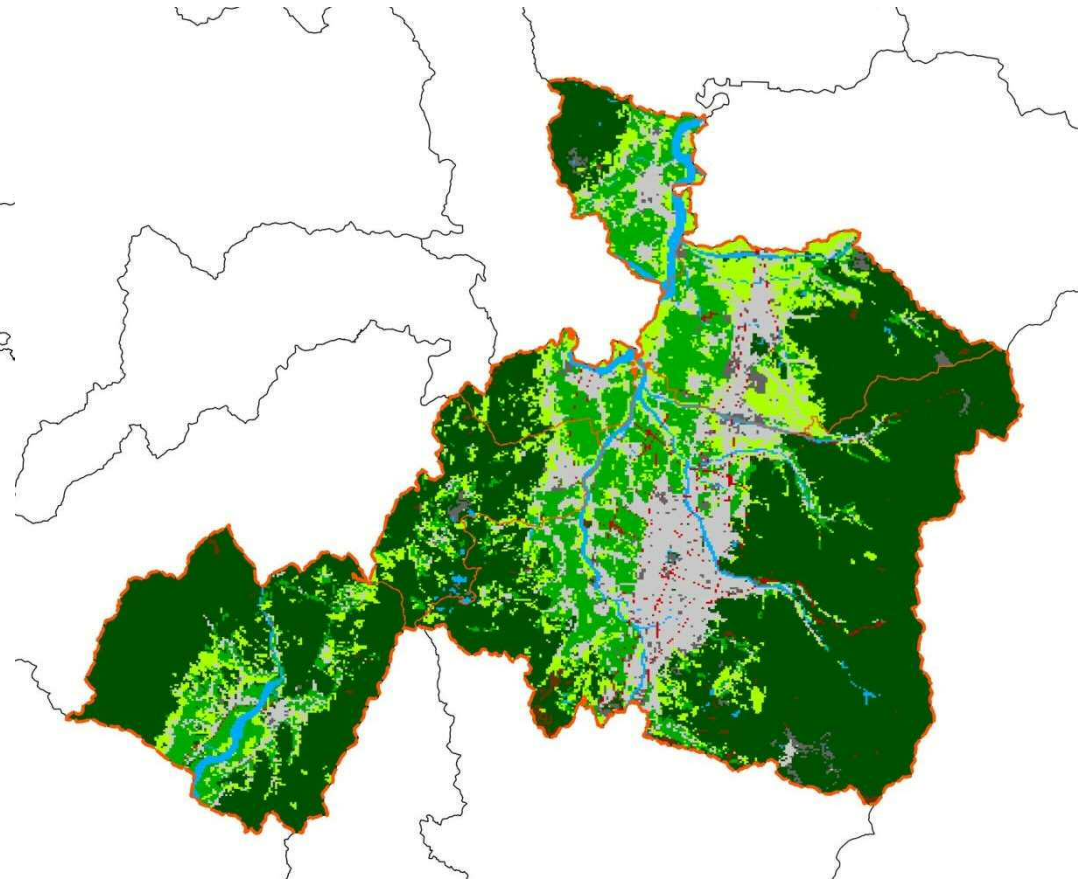
<土地利用図>

0 5 10 15 20 km

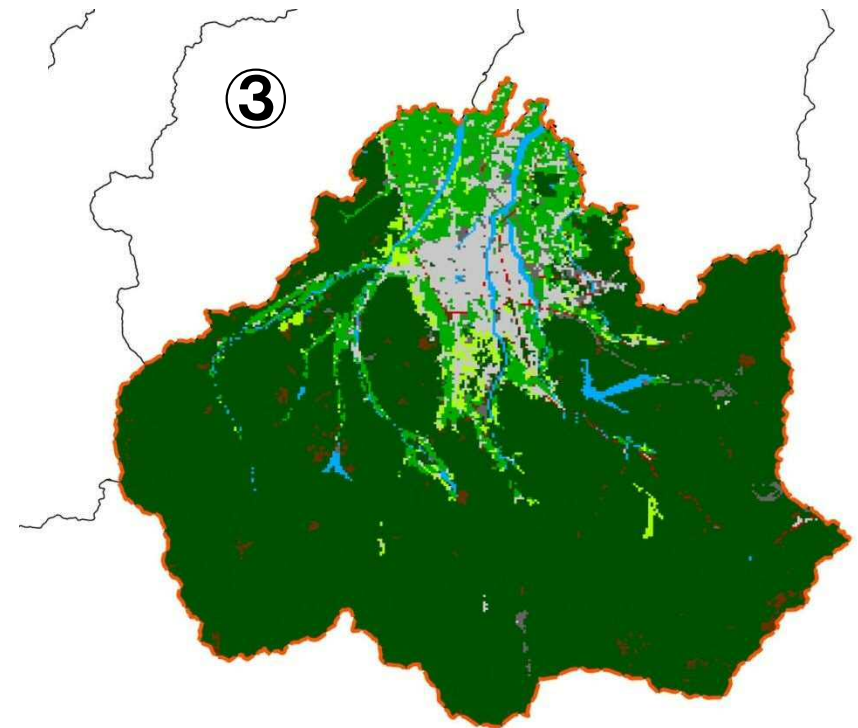
①



②



③



凡例

市町村界(紅花)

紅花

土地利用種別

田

その他の農用地

森林

荒地

道路・鉄道

建物用地

その他の用地

河川地及び湖沼

2 生物多様性リスト

山形県レッドリスト(昆虫類)

■ 絶滅危惧ⅠA類 (CR) 11種(旧県リスト:8種)

No.	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)		
				旧県 (2003)	新県 (2012)	旧国 (2007)
1	ウスバカゲロウ科	ハマベウスバカゲロウ	<i>Grocus solers</i>	VU	—	—
2	ヤンマ科	カトリヤンマ	<i>Gynacantha japonica</i>	NT	—	—

合計

2002年度策定版における県内生息域								
山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	0	1
0	1	1	0	0	0	0	0	2

■ 絶滅危惧ⅠB類 (EN) 11種(旧県リスト:7種)

	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)		
				旧県 (2003)	新県 (2012)	旧国 (2007)
3	トンボ科	マダラニワトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i>	VU	EN	CR+EN
4	カミキリムシ科	オニホソコバネカミキリ	<i>Necydalis gigantea gigantea</i>	EN	—	—

合計

2002年度策定版における県内生息域								
山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
0	0	0	0	1	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	1	2
0	1	0	0	1	0	0	1	3

■ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 26種(旧県リスト:14種)

	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)		
				旧県 (2003)	新県 (2012)	旧国 (2007)
5	ウスバカゲロウ科	コカスリウスバカゲロウ	<i>Distoleon contubernalis</i>	VU	—	—
6	バツタ科	カワバツタ	<i>Eusphingonotus japonicus</i>	VU	—	—
7	バツタ科	ヤマトマダラバツタ	<i>Epacromis japonicus</i>	NT	—	—
8	ハンミョウ科	ホソハンミョウ	<i>Cicindela gracilis</i>	NT	VU	NT
9	コガシラミズムシ科	マダラコガシラミズムシ	<i>Haliphys sharpi</i>	NT	VU	NT
10	ゲンゴロウ科	オオイチモンジシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus pacificus conspersus</i>	VU	EN	CR+EN
11	タマムシ科	ヤマトタマムシ	<i>Chrysocroa fulgidissima</i>	VU	—	—
12	カミキリムシ科	フタスジカタビロハナカミキリ	<i>Brachyta bifasciata</i>	NT	—	—
13	ハムシ科	キンイロネクイハムシ	<i>Donacia japana</i>	VU	NT	—
14	ハムシ科	オオルリハムシ	<i>Chrysolina virgata</i>	EN	NT	—
15	シロチョウ科	ヒメシロチョウ	<i>Leptidea amurensis vibilia</i>	VU	EN	VU
16	セセリチョウ科	ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus</i>	NT	EN	CR+EN
17	タテハチョウ科	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitchii</i>	NT	—	—

合計

2002年度策定版における県内生息域								
山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
1	1	1	0	0	0	0	0	3
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	0	1	0	0	0	0	1
1	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	0	0	1	0	0	0	1
0	1	1	0	1	0	0	0	3
0	1	0	0	0	0	0	0	1
1	0	0	0	0	0	0	0	1
1	0	0	0	0	0	0	0	1
4	4	6	1	2	0	0	0	17

■ 準絶滅危惧 (NT) 102種(旧県リスト:57種)

	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)		
				旧県 (2003)	新県 (2012)	旧国 (2007)
18	ウスバカゲロウ科	マダラウスバカゲロウ	<i>Dendroleon pupillaris</i>	DD	—	—
19	モノサシトンボ科	アマギルリトンボ	<i>Platycnemis echigoana</i>	NT	—	—
20	エトトンボ科	オオトラフトンボ	<i>Epitheca bimaculata sibirica</i>	NT	—	—
21	トンボ科	ハツチョウトンボ	<i>Nannophya pygmaea</i>	NT	—	—
22	カマキリ科	ウスバカマキリ	<i>Mantis religiosa</i>	NT	DD	—
23	コオロギ科	エゾエンマコオロギ	<i>Teleogryllus infernalis</i>	NT	—	—
24	コオロギ科	ミツカドコオロギ	<i>Loxoblemmus doeniczi</i>	要注目種	—	—
25	ヒバリモドキ科	キアンヒバリモドキ	<i>Trigonidium japonicum</i>	DD	—	—
26	キリギリス科	クビキリギリス	<i>Euconocephalus varius</i>	NT	—	—
27	バツタ科	ヤマトフキバツタ	<i>Parapodisma setouchiensis</i>	要注目種	—	—
28	オサムシ科	アカガネオサムシ	<i>Carabus granulatus telluris</i>	NT	VU	—
29	オサムシ科	ヤナザワメクラチビゴミムシ	<i>Trechiuma uncatum</i>	NT	—	—
30	オサムシ科	オソレヤマミズギワゴミムシ	<i>Bembidion negrei</i>	NT	—	—
31	オサムシ科	チュウジョウヒラタゴミムシ	<i>Agonum chuji</i>	NT	—	—
32	オサムシ科	アオホソゴミムシ	<i>Drypta ussuriensis</i>	NT	—	—
33	コガシラミズムシ科	キイロコガシラミズムシ	<i>Haliphys eximius</i>	DD	VU	NT
34	ゲンゴロウ科	チャイロチビゲンゴロウ	<i>Liodessus megacephalus</i>	NT	—	—
35	ゲンゴロウ科	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i>	NT	VU	NT
36	ミズスマシ科	コオナガミズスマシ	<i>Oreochilus punctipennis</i>	NT	VU	—
37	シデムシ科	ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i>	NT	NT	NT
38	クワガタムシ科	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei</i>	NT	VU	VU
39	コガネムシ科	オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i>	NT	NT	NT
40	カミキリムシ科	アカジトラカミキリ	<i>Anaglyptus bellus</i>	LP	—	—
41	カミキリムシ科	ルリカミキリ	<i>Bacchisa fortunei japonica</i>	NT	—	—
42	ハムシ科	イネネクイハムシ	<i>Donacia provostii</i>	NT	—	—
43	アゲハチョウ科	ヒメギフチョウ	<i>Luehdorfia puzioi inexpecta</i>	要注目種	NT	NT

2002年度策定版における県内生息域								
山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
1	1	0	0	0	0	0	0	2
0	1	0	0	0	0	0	0	1
1	1	0	0	1	0	0	0	3
1	1	1	1	1	1	1	1	8
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
1	0	0	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	0	1	0	0	0	0	0	1
1	0	0	1	1	0	0	0	3
0	0	1	0	0	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	0	1
1	1	1	1	1	1	1	1	8
1	0	0	0	0	0	0	0	1
0	1	0	0	0	0	0	0	1
1	1	0	0	0	0	0	0	2
1	1	0	0	1	1	1	1	6

	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)			2002年度策定版における県内生息域								
				旧県 (2003)	新国 (2012)	旧国 (2007)	山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
44	シジミチョウ科	チョウセンアカシジミ	<i>Coreana raphaelis</i>	NT	VU	VU	0	0	0	0	0	0	0	1	1
45	シジミチョウ科	クロミドリシジミ	<i>Favonius yuasai</i>	NT	—	—	1	1	0	0	0	0	0	0	2
46	シジミチョウ科	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i>	NT	EN	CR+EN	0	1	0	0	0	0	0	0	1
47	シジミチョウ科	オオゴマシジミ	<i>Phengaris arionides takamukui</i>	NT	NT	NT	1	1	0	0	0	0	0	0	2
48	タテハチョウ科	ギンボシヒョウモン	<i>Speyeria aglaja fortuna</i>	NT	—	—	1	1	0	0	0	0	0	0	2
49	タテハチョウ科	ウラジヤノメ	<i>Lopinga achine achinoides</i>	NT	—	—	1	0	0	0	0	0	0	0	1
50	セセリチョウ科	スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus</i>	NT	NT	NT	1	1	0	0	0	0	0	0	2
合計							14	17	13	3	5	3	3	4	62

■ 情報不足(DD) 44種(旧県リスト:23種)

	科名	和名	学名	参考(カテゴリー)			2002年度策定版における県内生息域								
				旧県 (2003)	新国 (2012)	旧国 (2007)	山形市	米沢市	酒田市	天童市	山辺町	中山町	河北町	白鷹町	4市4町合計
51	ウスバカゲロウ科	カスリウスバカゲロウ	<i>Distoleon nigricans</i>	DD	—	—	0	1	0	0	0	0	0	0	1
52	コガネムシ科	ヒゲブトハナムグリ	<i>Anthypna pectinata</i>	DD	—	—	1	0	0	0	0	0	0	0	1
合計							1	1	0	0	0	0	0	0	2

全計	19	24	20	4	8	3	3	5	86
----	----	----	----	---	---	---	---	---	----